地域づくりの現場を訪ねる〔第10回〕

島を美しくつくる会（愛知県西尾市）
－島外ボランティア等交流･関係人口を活かした離島における地域づくり活動－

一般財団法人国土計画協会顧問・客員研究員　太田 秀也

1．島を美しくつくる会の活動

島を美しくつくる会（以下「会」という）は、愛知県西尾市（人口169,284人（2025年４月１日現在）の佐久島において活動する任意団体である。

佐久島は、知多半島と渥美半島に抱かれた、三河湾のほぼ真ん中にある離島（一色港から定期船で約20分の位置）で、主な産業は漁業と観光業である。現在の人口は172人(2025年４月１日現在)で、高齢化率は57％となっている。

かつては､佐久島村であったが､1954年に一色町に編入され、2011年には一色町、吉良町、幡豆町が西尾市と合併し、現在は西尾市に属している。

島の案内板

（以下、写真は筆者撮影）

会は、1996年に結成され､「祭りとアートに出会う島」をテーマに、島外ボランティア等交流・関係人口を活かした離島における地域づくり活動を行ってきた。

その活動により、2003年度に地域づくり表彰・全国地域づくり推進協議会会長賞、2012年度に地域づくり表彰・日本政策投資銀行賞を受賞している。

以下、活動の概要を、会のHP等の情報をベースに紹介する。

(1) 活動開始のきっかけ・経緯
―会結成から30年目―

佐久島では、1947年には1600人超あった人口が減少の一途を辿り、また1990年代の三河湾地域リゾート整備構想の開発計画が頓挫したことも重なって、島民の危機感が高まっていた。その頃、国土庁の調査委員会（「よい風が吹く島が好き女性委員会」）が佐久島を視察に訪れ、開発の手を逃れた豊かな自然や景観こそが佐久島の貴重な資源であることが提唱された。これをきっかけに、佐久島の自然を現代アートと融合した、これまでにない発想による島おこしを進めるために、「島を美しくつくる会」が1996年５月に結成された。

会は、島民の自主的かつ創意あふれる活動を通して、自然、風土、歴史、産業といった佐久島固有の資源を発掘・研磨し、島の活性化（経済的発展、交流人口の増大、定住人口の確保など）を推進することを目的とし、「ひと里」「美食」「漁師」「いにしえ」の４つの分科会を核に「アートによる島おこし」をスタートさせた。2001年にはアートディレクターを変更し､「祭りとアートに出会う島」をテーマに、島の人たちをつなぐ祭りと現代表現であるアートがお互いを刺激しあうように取組を変更し現在も活動を続けている。

(2) 現在の活動内容
―各種分科会設立による島民による活動―

①ひと里分科会
- 黒壁運動＆里山づくり

②漁師分科会
- 漁村集落環境の保全（アマモ藻場再生等）

③美食分科会
- タコしゃぶ等名物料理の開発・研究・登録等

④いにしえ分科会
- 伝統・歴史のPR（太鼓フェスティバル開催）

● 文化財等の保全（古墳保全等）

⑤その他の活動

● 島民参加・交流の促進

● アーティストの作品メンテナンス　など

2．インタビュー、現地調査

2025年10月25日・26日に佐久島において、会の鈴木喜代司会長（写真左）、西尾市佐久島振興課三矢由紀子課長補佐（写真右）へのインタビューを行うとともに、現地調査を行った。

(1) インタビュー

（質問への回答は、「市」と付記する以外は鈴木会長）

①会の取組について

会の取組の特徴などについてお教えください。

島の人口が減少して、自分たちが住んでいる環境も島民だけでは整備できなくなっている中、島外のボランティアの方の力をお借りして、整備のお手伝いと島での体験を楽しんでもらえるよう活動を続けていることです。

様々な活動を行われていますが、現在のメインの活動の内容をお教えください。

ボランティア活動の主なものは、漂着ゴミの回収、アマモ藻場の再生、里山保全活動、黒壁運動、佐久島太鼓フェスティバルです。

黒壁運動は、「三河湾の黒真珠」といわれる黒壁の集落の保全・再生活動で、毎回３～４棟の家屋を、黒ペンキで上塗りしています（ペンキ代だけは家屋所有者の方に負担いただいています）。毎年100名程度のボランティアを募集しますが、リピーターの方もあり、人気の活動ですぐに集まります。作業は２時間に限り集中してやっていただき、作業が終わったら島を楽しんでいただいています。

漂着ゴミの回収、アマモ藻場の再生、里山保全活動は、島の海を豊かにしたい想いの活動で、全てが関連を持っていて、未来の子どもたちに伝えなければいけない重要な活動です。

アマモ藻場の再生は、2002年佐久島中学校（現在の西尾市立佐久島しおさい学校）の総合学習で１人の中学生の、将来自分が漁師になったとき魚が沢山いてほしいとの想いが詰まった活動がきっかけで今でも後輩たちが受け継ぎ、種をまき、育ったアマモを移植する活動を島の漁協と会が手伝っています。

里山保全活動では、梅園整備、山を明るくするための雑木の伐採、竹林の整備などを行っています。梅園では実った梅で梅干を作り、ボランティアの方にお土産としてお返しする活動も行っています。

【市】アマモ藻場の再生では、本年１月にJブルークレジット（海洋生態系（ブルーカーボン）が吸収したCO_2を定量化し、取引可能なカーボンクレジットとして活用する制度）の認証を受けています。今後、取引が成立すれば、ボランティア活動の資金として活用できるので、会としてもっと活発な活動が期待できます。

（佐久島太鼓フェスティバルは下記現地調査参照）。

②会長の会との関わり

鈴木さんはどのような経緯で会の活動に参加され、活動を続けられているのですか。

若くから島の自治会の活動に参加していましたが、会の立ち上げにあたって代表となり、以降、一時会長を別の方にお願いして副会長として関与したこともありますが、現在も会長として、30年、会の活動にかかわっています。現在は子供に家業の民宿を委ね、会の活動を中心に過ごしていますが、若いころは家業と会の活動の両立で大変でした。

大変な中で気苦労も多かったのではないですか。

何もない島というコンセプトでやっていたので、何かやるとほめて認めていただくという感じで、無理に何か新しいことを続けないといけ

ないということはなかったので、気苦労は感じませんでした。

③行政との関わり

行政との連携はありますか。

西尾市からは活動への支援をいただくとともに、会の活動へのメディア取材や視察の対応窓口を担っていただいています。海外からの方も含め、年間20～30程度の視察、取材があり、それに市から担当者が同行・案内いただいています。その際には、移住者がオープンしたカフェ等に立ち寄っていただき、店を利用いただけるようにお願いしています。

市として会の活動をどのように捉えられていますか。

【市】西尾市として、佐久島振興課を設け、離島航路の運営、離島振興や定住促進、観光振興等を進めていますが、会の活動と連携した取組が重要と考えており、会の活動費用の支援（年間180万円）を行っています。アマモ藻場の再生では、県の交付金の支援の窓口も行っています。その他、佐久島のSDGs（ボランティア活動）の取組を発信・支援しています。

④取組が継続している要因

会結成から30年目になりますが、取組が長く継続している要因はどのようなことが考えられますか。

ボランティアの方は、佐久島のファンであり、島での体験を楽しんでもらっています。島民もボランティアも佐久島に愛着があることが要因ではないかと思います。私たちはそのファンを大切にしていかないといけないと思います。

活動の継続にためには、後継者の育成が重要だと思いますが、その点はどうなっていますか。

今中心に活動しているメンバーは、私を含め70前後の者が多いですが、若手でも数名熱心なメンバーがおり、３年内にはこれら次の代の者に活動を担ってもらうように考えているところです。

⑤取組の効果（地域への効果など）

取組の効果はどのようなものがありますか。

まずSNS等をみた観光客など、交流人口が増加したことです。また、最近ではボランティア活動に参加する方、企業や学校の研修などで訪れる関係人口も増えています。

活動の当初では、他の地域に真似て、お土産になる特産品の検討も行いましたが、今では、島に来ていただく方が、島でおいしいものを食べ、楽しい体験をしていただけて、別にお土産を作る必要はないと感じています。

加えて、長年続けているボランティアの活動もSDGsの取組として評価されています。

【市】コロナ禍もあり現在の観光客は約７万人ですが、ピークでは10万人を超えていました。

⑥活動のなかで生じた課題

活動のなかで生じた課題があればお教え下さい。

アートによる島おこしの活動は、当初はアーティストが島外で作成した前衛的な作品を期間限定で展示するといった外部のアーティスト任せ、受身のようなところがあり、島民もなじめず葛藤が生じました。そこで島民も主体的にかかわるようにし、アート作品の内容や設置場所もアート関係者と協働して決め、島内に滞在して作品を制作していただくといったかたちに変えていきました。「おひるねハウス」「イーストハウス」といったアート作品はSNS等を通じて人気で、交流人口の増加につながっています。

「おひるねハウス」

「イーストハウス」

⑦取組の今後の展望（新たな事業展開など）

今後のめざす方向や新たな事業展開の構想があればお教えください。

基本的には今の活動を続けていく考えですが、環境問題を軸に漂着ゴミ回収活動など、島を美しくする活動を更に進めていきたいと思っています。

⑧地域づくりを行う団体への取組のヒント等となるアドバイス

これまでの活動を踏まえ、地域づくりを行う団体への取組のヒント等となるアドバイスがあればお教えください。

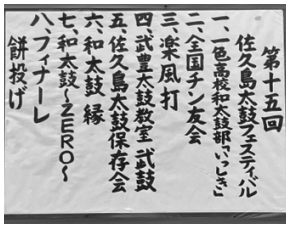
自分たちが住む地域は自分たちで考えて守っていくという気持ちが必要だと思います。ただ人口が減少している中で、地域外の方の協力、力を積極的に受け入れる姿勢が重要だと思います。

(2) 現地調査

2025年10月26日に開催された太鼓競演イベント「佐久島太鼓フェスティバル」を見学させていただいた。このフェスティバルは、伝統の佐久島太鼓を若者や子どもたちが継承していく中で、「和太鼓で島を盛り上げよう！」と、2009年に、愛知県内で活躍する七つの和太鼓チームが島に集結し、佐久島太鼓との競演が実現し、それ以来継続的に開催されているもので、本年で15回目を数える。

（佐久島太鼓は、佐久島の祭りに欠かせない奉納太鼓で、「バチ」はゆるくカーブし、グリップが付いていて、太鼓も一般的な和太鼓よりも皮（牛の皮）の張り方がゆるめで、重低音に特徴のあるユニークな太鼓）

本年は、島内外７団体が参加し、10時から14時30分にわたり開催された。各団体が創意工夫を凝らした迫力ある演奏が繰り広げられた。あいにく当日は雨模様であったが、多くの観客（350人ほど）で賑わった（多い年では500名程度の観客があるとのことである）。



プログラム

実行委員会のメンバー

佐久島太鼓の演奏

3．まとめと若干のコメント

以下、島を美しくつくる会の取組のポイントと思われる点をまとめるとともに、若干のコメントをしたい。

(1) 取組のポイント

本誌2024年１月号50項以下において、「地域づくり表彰の表彰事例の整理・分析」として、これまでの地域づくりの取組事例を整理・分析したが、その内容も踏まえ、協議会の取組をみると、以下のようなポイントが挙げられる。

①取組の位置づけ

地域外の者を地域に呼び込むことにより地域活性化を図る「事業活動」（同誌53頁参照）であり、活動のきっかけ・経緯は「新たな企画の提案」（同誌52頁参照）と位置付けることができる。

②取組の継続性

活動が30年継続し、現在も活動へのボランティアの参画も活発であり、また後継者の目途もたっていることから、今後の活動の継続性も期待できる。

(2) 若干のコメント

本取組は、人口が減少している離島において、島外のボランティアや観光客など、関係人口を確保しながら、地域づくりを行っている事例として特色を有する。

その際、何もない島というコンセプトをベースに、肩ひじ張らず無理をせず、外部の人材の力も借りて活動を行うという姿勢が注目される。

外部のボランティアなどをお願いする場合にも、時間を２時間に限って行うという作業方針等も参考となる。

加えて、他の地域では、お土産になる特産品の開発にも苦労されている事例もみられるが、島での体験、島で過ごす時間自体がお土産として受け止められ、お土産の開発がいらないという点も注目される。

※本稿の内容は、筆者の見解であり、筆者の属する組織及び地域づくり表彰主催団体としての意見ではないことを申し添える。